

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第十三回

小さな大国

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 十三回 小さな大国

カリブ海に浮かぶ英領バージン諸島を本拠にして5年になる。北緯18度西経64度周辺の大小約60島から成り、あわせてやっと小豆島の面積だ。ほとんどが無人島で、「宝島」物語のモデルになったノーマン島もそのひとつ。亜熱帯ジャングルの緑に覆われた険しい山脈が、群青の海にどっぷり浸かった姿を想像するといいい。

国旗にラテン語でVigilate（用心深く）とある国標の通り、島民は至極用心深い。ほとんどの人が、植民地時代に綿花や砂糖黍を栽培する農園で過酷な奴隷労働を強いられた、アフリカ人の子孫だ。当然のことだろう。

その用心深さが国運を変えた。第2次大戦後、「陽が沈まぬ」とまで言われた大英帝国の崩壊に、世界は独立解放の熱に浮かれ騒いでいた。その世情に背を向けた島民は、独立を勝ち取ったカリブ海域諸国どころか、全世界に散らばる元英国領の国々の笑い者になったと聞く。島のリーダーたちは、「人口1万人少々の（当時）島国に独立国家経済を維持するゆとりはない」と気にもかけず、「笑う方が非常識」と動じなかったそうだ。英国海外領地として小国の活を求める道を選び、外交と防衛は英国にまかせて、内政は独立国と違わない自治権を取得した。用心深さは先見の明を誘うのか、世界史を顧みれば賢明な選択だった。

60年代まではインフラなど何もなく、島民は貧困に喘いだ。しかし用心深い人々は、島の宝は人民と自然のみと、教育や自然保護を重視した。この姿勢は自然環境保護運動で大きな業績を残した慈善実業家ローレンス・ロックフェラー氏に深い感動を与えた。彼は私財を投じて、空港や、港、電気、上水道、道路などを整備し、超高級リゾートを開発した。そのおかげで観光部門が発展し、常夏の島国の経済を潤した。

それでも用心深い島民は、観光部門に偏るリスクを案じて、自然を破壊しない産業部門を探し続けた。80年代に、オフショア法人・金融部門に注目した

が、ノウハウがない。それを聞き知って動いたのが、ロックフェラー同様、島の自然と賢明な島民を愛する一人の観光客だった。

ニューヨークの高名な弁護士だったその人は、島国のリーダーシップ精神に感動し、ウォール街の仲間を集めて無償奉仕で手伝うと名乗り出た。米国を含む世界各国の法人税改正や、不正資金洗浄を防ぐ管理対策など、予想以上の大仕事となった。が、小さな国の偉大なビジョンに一心奮起したチームは、無償の約束を守り最後までやりとげた。カリブ海の奇跡とまで言われる高度成長が始まった。

戦後の通貨の選択も用心深く、独自貨幣は小国に損と拒否したことも幸いした。英ポンドより米ドルが地理的に優位だと、ドルを選んだ。米ドル通貨の特典に英領の安心と良いガバナンスが加わるオフショア法人・金融センターは、希少価値が高い。資産額で世界のトップを競うまでに発展した。

しかし今、アメリカ発経済危機が、観光とオフショア部門双方を直撃している。それでもこの島国はびくともしない。我が国のように行政が労働市場の流動性を束縛した歴史もなければ、危機だからと偏った労働政策など考えない。

島民は職をひとつに限らない。昼間は役人、夜は自動車整備工、週末は農業など、自分のことは自分でと、様々な危機管理をしてきた。早朝から出勤までの2時間を我が家で働くお手伝いさんも、昼間は役所勤め。「失業したら、社会保障が最低限の生活を保証してくれる。それよりも、迫害の歴史が培った仲間社会や大家族が、面倒をみてくれる。不安などない」と、まるで平気だ。

雇用激震に国民の不安が増す我が国に想いを馳せる今日この頃。この島国が小さな大国に見えるのは、私のひいき目なのだろうか。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇九年四月七日付の電気新聞に、
寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。